

## 研究ノート

# 19世紀日本における裁縫と女性

熟 美 保 子

### はじめに

「クレールの刺繍」は、まもなく生まれる子供の養育を放棄しようとする17才のクレールと、大事に育てた息子を亡くしたばかりのメリキアン夫人の交流をえがいた映画である。このストーリーにおいて、彼女たちの心の変化を導く重要な鍵となるのが、「刺繍」という針仕事である。この「刺繍」という手作業によって、二人の女性は生計を立て、心を癒していく。

近世（江戸時代）の日本においては衣類は自ら創り、そして何度も繕って着用する。その過程で自然と裁縫は女性の重要な手仕事となった。針筒・糸巻き・針山（針さし）・はさみなどの道具が入った裁縫箱は嫁入り道具の必需品であり、江戸末期になると引き出しがついた便利な小箆筒型へと進化している<sup>1</sup>。このような裁縫箱を嫁入り道具にする伝統的風習が今でも根強く残る場がある。皇室から民間に嫁ぐ際、母は婚礼家具を購入しない娘に裁縫箱と救急箱を持たせたという（『神戸新聞』2005年11月16日付朝刊）。

ところで現代日本において、一般女性が針を持つ機会は何の程度だろうか。中国での生産が可能となり、安価な衣料品が大量に普及するようになった。おそらく、針を手にして繕う機会は以前よりも少なくなっているだろう。とくに若い女性たちの間では縫い物をする風景はあまり見られない。

近年の教育制度では、裁縫・料理などの「家庭科」は男子も女子も等しく履

修するが、一昔前までは授業は別れておこなわれていた。天皇の「田植」、皇后の「養蚕」にも象徴されるように、裁縫を最終工程とする衣料生産は歴史上、女性と結びついていた。網野善彦氏によると、男性の農業や山仕事に対して、木綿や養蚕、絹織物、麻織物は一貫して女性が自分で生産販売して稼ぎにしている<sup>2</sup>。すなわち、「衣料生産、繊維産業は、弥生時代から江戸時代に至るまですべて女性の独占的労働分野」で、「明治以降もこの領域が女性の独占的な労働分野」であったのだ。

このような衣料生産と結びついた女性のイメージについて、「ジェンダー」の視点からも研究がなされている<sup>3</sup>。

小稿では、衣料生産の中でも「裁縫」という家政労働に着目して、女性の日常性にアプローチする。そして、江戸から明治という時代変化の中で、裁縫の歴史的な位置づけにもふれていきたい。

## 1. 近世日本の裁縫と女性

明治7年(1874)に出された女性向け教訓書である「女訓」を見ると、「女はこれら(縫針)の事をつとめざれば、如何なる業にたけたりとも、女の道にそむけるなり。開けし国々の女はみな、是れ等のことに昼夜心をつくし、学び得たる後にあらざれば、嫁いりせざるなり<sup>4</sup>」と書かれている。すなわち、裁縫が出来なければ女性の道に反しており、文明開化の国々(近代国家)の女性はみな、それを習得してから嫁入りするという。もちろんこの「裁縫は必須」という考え方は明治になって突如出現したわけではなく、その前の江戸時代から引き継がれたものである。

元禄5年(1692)に刊行された女性用百科事典の『女重宝記』に「裁縫の事」という項目がある。近世の日本において、裁縫は書筆、詠歌、弾琴とともに「女の四芸」の一つにあげられ、「女子第一のわざ」であった<sup>5</sup>。また、様々な衣類の寸法と裁断図を記した享和3年(1803)の上原素白「裁縫早手引」にも「琴・三味線のけいこより心安ク」と記されており<sup>6</sup>、やはり裁縫は第一に手がける

基本的教養であったといえる。

具体的に近世女性の裁縫イメージを広げるために、**図1**を見てみよう。弘化5年（1848）に出された菑亭主人なる人物の「衣服往来」に載せられたものである。これには「裁縫雛形」として寸法が記された裁断図も収められており、裁縫のための実用書であったことがわかる。

さてここには3人の女性が描かれており、そのうちの一人が着物を広げて示し、他の女性はそれを食い入るようにのぞき込んでいる。おそらく着物を手にした女性が二人に縫い方を教えているのであろう。手つかずの反物が部屋の中にくっつか見られることから、指導している女性は本格的に裁縫をしていたようだ。また彼女の脇には小箆筒型の裁縫箱があり、少し開いた引出しからは様々な裁縫道具が見える。針山にささった数本の針や、手近に放り出されたよ



**図1** 江戸時代の裁縫の図  
「衣服往来」1848年（『家政学文献集成続編 江戸Ⅳ』）より

うに置かれた物差しやはさみなどから、手本を示しながらの実技指導の様子がうかがえる。

教訓書に女性のたしなみとしてその必要性が述べられ、実用書も出版される裁縫だが、はたしてその実体はどうだったのだろうか。江戸時代における女性の日記から考えてみたい。日記に記録されるのは当然、その日の印象深いものや覚えておく必要のある事柄が中心となる。つまり、日々の習慣になっている事はあまり記録されず、特にルーティンワークの家事労働などはもっとも残りにくい。その傾向にある中、「日知録」<sup>7</sup>には比較的家事の記述が多く見られる。

「日知録」とは、紀州和歌山にある商家の女性の日記で、寛政3年(1791)4月～12月、文政8年(1825)8月～12月の分が残っている。筆者の沼野みねは明和8年(1771)に生まれ、文政11年(1828)にその生涯を終えた。幼くして両親を亡くしたために、天明5年(1785)に婿養子を迎えており、残された日記の時点ではすでに妻、母の立場になっている。

まず寛政3年についてみよう。この日記を見ると、「ぬいものをいたし申候」という記述が頻繁に出てくる。【表1】は寛政3年の日記から「ぬいもの」の

【表1】 「日知録」にみる裁縫記事の日付

| 寛政3年(1791) |  | のべ日数 |
|------------|--|------|
| 4月         | 20・21・22・23・24・28・29・30                      | 8日間  |
| 5月         | 1・2・3・4・8・11                                 | 6日間  |
| 6月         | 2・4・5・6・7・8・9・10・12・13・14・16・19・20・22・26・30  | 17日間 |
| 7月         | 1・2・4・5・6・11・12・13                           | 8日間  |
| 8月         | 16・17・18・19・20・25・26・27・29・30                | 10日間 |
| 9月         | 2・3・4・5・6・7・8・9・10・24・26・27                  | 12日間 |
| 10月        | 4・6・8・9・10・13・16・17・22・24・26・27・28           | 13日間 |
| 11月        | 1・3・4・5・6・9・10・12・13・14・15・18・19・20・26・27・28 | 17日間 |
| 12月        | 2・3・4・5・7・10・11・12・18・25・27・28・29            | 13日間 |

注)「日知録」(『和歌山市史』第5巻)より作成

記載のある日付をすべて抽出したものである。多いのは6月・11月ののべ17日間、最も少い5月でものべ6日間の記載がある。

他の家事労働については、洗濯・染め物類が月平均1.9日、整理が月平均2.1日、糸くりが月平均0.8日記載されている<sup>8</sup>。このことから、みねにとって「裁縫」の頻度が他の家事労働よりも突出して多いことがわかる。実際、日中・夜分・夜なべなど一日のうちでも時間をおきながら何度も縫い物をしている日もある。みねが「ぬいもの」に重点をおいていたことは明らかだ。ちなみに、着物を仕立て（5月8日記述分）たりしていたようだが、ほとんどが「ぬいものをいたし申候」という記述だけで、誰の何を縫っているのかなどの詳細については分からない。

逆に「ぬいもの」をしなかった日については、その理由もあわせて書き残されている。「気分すくれす候故、ぬいものいたし不申（8月8日）」、「風気ニ而気分悪敷、ぬいものいたし不申（10月20日）」、「殊の外寒つよく、一日こたつへはいり居、ぬいもの致不申（11月21日）」、「此間中より心にかゝり、むしやむしや致候事有而、遊びくらし候、一両日中ぬいものいたし不申候（11月24・25日）」と、「気分がすぐれない」、「風邪」、「一日こたつでゴロゴロ」、「むしゃくしゃする」などの理由が挙げられている。「ぬいもの」をした日よりもしなかった日の記述の方が詳しいということは、それだけ縫い物が日々の慣例化した家事労働であった証拠であろう。

一方、30年以上経過した文政8年（1825）については、8月14日・12月7日にしか「裁縫」に関する記述は見られない。みねは寛政3年（1791）の時点では21才、文政8年では55才になっており、亡くなる3年前である。視力の低下など年齢からくる問題もあって、「裁縫」のような細かい作業の家事労働から遠ざかってしまったのではないだろうか。実際に「りやうし（療治）」の記述も度々あり、病気がちであったようだ。

もちろんこのようなみねと裁縫の関係が、江戸時代の全女性にあてはまるわけではなく、やはりそれぞれの女性の生活実態によって異なってくる。たとえ

ば川合小梅の『小梅日記』や、西谷さくの『さく女日記』にはこれほど「裁縫」の記述は見られない。その原因は小梅は画家、さくも家業の主力として家事労働以外の仕事を持っていたためだとという<sup>9</sup>。裁縫を通して江戸時代の女性の日常性を考えるために、さらに他の日記も検討していく必要がある。

## 2. 最も小さい道具——針

次に、裁縫には欠かすことのできない、女性の家事労働のうちでも最も小さい道具——針について考える。針の原料である鉄の生産地としては、アンソニー・リードも「東南アジアは鉄・銅・錫・ニッケル・鉛など鉱山資源が比較的豊富である」と述べているように、東南アジアが思い浮かぶ<sup>10</sup>。そこでは良質の鉄をクリスなどの刀剣作製のために使用していたという。その一方で、安価な鉄と鉄器が中国から東南アジアへと積み出され、その中には針も含まれていた。

ちなみに『イメージ・シンボル事典』によると、針 (needle) は男性器、結婚などの象徴である<sup>11</sup>。そこから導かれるのは、結婚した女性、つまり主婦の姿であろう。

それでは日本に視点をうつしてみよう。日本で針が製造されるようになった具体的な時期については明らかではないが、すでに室町時代には「姉小路針」と称される国産針が流通している。その後江戸時代になると大量に生産され、流通が広がった。

実際に「鉄針」を含め、鉄製品は販売されていた。1818年の3月31日、オランダ商館長ブロムホフが江戸への参府途中、ちょうど四日市を過ぎたあたりで「刀剣と鉄細工の製作で有名」な宿に泊まっている<sup>12</sup>。「この地にはまた、鉄・銅製品の店がたくさんあり、風変わりな家具類の部品各種が豊富に間に合う」とも記されており、鉄製品が近世の日本で普及していた状況がうかがえる。

なお、京都が針の産地として最も有名であった。その中でも中世から続く「みすや」の針は上品とされ、商人は販売する針を「皆みすや本家と号」する

ほどのブランド針だった<sup>13</sup>。

日本における針の製造をイメージするために、**図2**を見てみよう。この図は、男性は力をこめて針を磨き、女性はそれを点検しながら紙に包むという最終工程が描かれている。やはり看板には「本みすや」と掲げられている。くずし字の部分には「又、本朝応神天皇十四年の春、百濟国よりふたりの婦人を貢とす。其工ミなる事甚妙也。是縫もののはしめなり。其製する所は、京都姉か小路翠簾屋をもつて世に鳴る。五十本を以て一匹といふ」と書かれている。ここからもみすや（翠簾屋）が名の通ったブランド品であることがわかる。

ちなみに、江戸時代の様々な職人の図像が集められた「七十一番歌合」（1744年以前）、「建保歌合異本」（1774年）、「職人尽発句合」（年不明）をみると、「針磨」と称する職人が描かれている<sup>14</sup>。また同様に職人たちの目録である貞享期に出た「京羽二重」には「針師」が掲載されている<sup>15</sup>。つまり、「針」にたず



図2 針製造の図

〔彩画職人部類〕1784年（『日本庶民生活史料集成』第30巻）より

さわる様々な手工業技術者が存在し、京都において一定の地位を確立していたのである。

次に針の販売状況を考えるために、天保2年(1831)と嘉永4年(1851)の『京都買物独案内』<sup>16</sup>を見てみよう。ちなみに『買物独案内』とは、消費者が目的の商品を購入するための店案内のハンドブックであり、逆に商店側にとっては宣伝広告の役割をはたした出版物である。もちろん江戸、大坂についても同様のものがある。この『京都買物独案内』の中で針を扱った商店は、天保版では20件、嘉永版では11件掲載されている。両方を比べると、8件が同じ広告を出しており、安定した経営を続けていたようだ。また、先ほど挙げた「みすや」の針もこの中で宣伝されており、天保版では20件中5件が取り扱っていた。

それでは針の販売価格はどのくらいだったのだろうか。岡田敏雄『ぬい針』には、嘉永期から明治初年にかけて近江の大津における針の相場があげられている<sup>17</sup>。それによると、年間の販売量は514万6000本(嘉永4年)から186万3600本(明治4年・1871)へと減少しているにもかかわらず、売り上げ高は9400貫600文から12271貫200文と増加している。すなわち、幕末から明治への物価変動にともない、針の単価そのものも上昇したのである。

さて、『京都買物独案内』には「長崎唐もの品々」・「唐針」・「南京直傳」などの宣伝文句も見られ、中国製の針も京都で販売されていたようだ。鉄針の輸入は古く、正倉院にも収められていることから、当初は上流階級の使用品であったことがわかる。先にもふれた東南アジアと同様「中国産鉄針」のマーケットに日本も組み込まれており、針穴からのぞいてみるとまさにアジア貿易の世界が広がっている。

それでは、近世日本における中国製鉄針の輸入状況について具体的に考えてみたい。まず中国での鉄針の製作方法だが、そこには高度な技術といくつもの作業段階が必要とされ、中国明代の技術書『天工開物』の中でもその工程が紹介されている<sup>18</sup>。そのポイントをまとめると、以下の通りである。

- ①鉄を鍛えて細長い線状にし、針金をつくる。



- ② 1寸ずつに断ち切って針の形にする。
- ③ 末端にはやすりをかけて針先をつくり、根元はたたいて平にする。
- ④ 針穴をつくり釜に入れてとろ火であぶる。
- ⑤ 土でおおい下から火で蒸す。
- ⑥ 十分に火が通ったら、針を水に入れて焼き入れする。

以上の工程を経て製品化された「針」が、海を越えて日本に入ってきたのである。

次に、鉄針の輸入数量について見てみよう。近世の日本における中国との窓口として、まず長崎があげられる。長崎に来航した中国船による輸出入品の数量データについては、永積洋子編『唐船輸出入品数量一覧』という詳細な整理がある。これはオランダ側の記録から長崎に来航した中国船の輸出入品について集計した資料集で、1637年から1833年の年度ごとの輸出入品目と数量が判明する。

この中から「針」に関する記述をすべて抜き出したのが【表2】である。針の輸入量は万・十万本と大量である。また、「箱」「包」という単位もあるが、よほど小さい箱や包みででないかぎり、多くの本数の「針」が入るだろう。こ

【表2】 長崎における針輸入量

| 和 暦 | 西 暦  | 船                  | 品目・数量                                       |
|-----|------|--------------------|---|
| 承応3 | 1654 | 安海<br>広南<br><br>暹羅 | 中国針 1箱<br>釣針 53斤<br>中国針 400000本<br>針 40000本 |
| 万治2 | 1659 | 南京・安海・福州<br>福州     | 針 1箱<br>針 300000本                           |
| 宝暦3 | 1753 | 定海                 | 針 20000本                                    |
| 宝暦7 | 1757 | 5番                 | 縫針 30000本                                   |
| 明和7 | 1770 | 4番乍浦船              | 縫針 500包                                     |

注) 永積洋子編『唐船輸出入品数量一覧』(創文社、1987年)より作成

のことから、中国船は一度に大量の「針」を長崎に運んでいたことがわかる。

しかし生活必需品である「針」の輸入のわりに、記載年度が少ない。その理由としてまず第1に、国内での需給バランスの成立があげられる。つまり、国内生産分で消費量は賄われていたのではないだろうか。第2に、史料の残り方の問題が考えられる。例えば文化10年（1813）には17箱の「雑貨」が輸入されている。他にも数箱単位の「雑貨」の記述が頻繁に見られることから、具体的な品目名まではわからないが、「雑貨」としてまとめられた商品群が近世を通して長崎に輸入されていた。あくまで想像の域を出ないが、この中に「針」も含まれていた可能性も考えられる。

一方、中国からのモノの輸入を考える上で、琉球という窓口も忘れてはならない。真栄平房昭氏は周益湘「道光以降中琉貿易的統計」から「鉄針」のデータを生活史の視点で整理・分析し、「大量の鉄針が進貢貿易を通じて琉球に輸入された」ことを明らかにした<sup>19</sup>。そしてこの輸入針は当時のハイテク技術を駆使した日用品であったという。これ以外にも中国から琉球への輸入データとしては、1993年に出版された『清代中琉関係档案選編』の「清單」と呼ばれるリストがある。これにも琉球と中国間の商品の輸出入量と、それらの免税額が記されている。

このように「道光以降中琉貿易的統計」と『清代中琉関係档案選編』の「清單」から、中国から琉球への輸入データが明らかになるわけだが、二つを比べてみると年によって数値に若干の違いが見られる。また、「道光以降中琉貿易的統計」は比較的年度が揃っているが、19世紀以降の数値しか判明しない。一方、『清代中琉関係档案選編』の「清單」には18世紀からのデータが残っているものの、遺漏年度も多い。

小稿ではより長期的な動向をみるために、『清代中琉関係档案選編』の「清單」を底本とし、鉄針の輸入量を【表3】として一覧にした。なお、数値の記載がない年度は「鉄針」の記述がないということである。これによって、残されたデータの範囲内ではあるが、「鉄針」はほぼ毎回、中国から琉球に輸入さ

れており、その分量も2万～20万本と大量であったことがわかる。これには琉球の染色文化も少なからず影響しているだろう。琉球では布は年貢（税）とし

【表3】 琉球における鉄針の輸入量

| 西 暦  | 中国暦  | 和 暦  | 数 量     |
|------|------|------|---------|
| 1767 | 乾隆39 | 明和 4 | —       |
| 1774 | 乾隆39 | 安永 3 | 20000根  |
| 1775 | 乾隆40 | 安永 4 | 40000根  |
| 1776 | 乾隆41 | 安永 5 | 20000條  |
| 1777 | 乾隆42 | 安永 6 | 20000根  |
| 1778 | 乾隆43 | 安永 7 | 20000條  |
| 1803 | 嘉慶26 | 享和 3 | —       |
| 1821 | 嘉慶26 | 文政 4 | 40000根  |
| 1822 | 道光 2 | 文政 5 | 40000根  |
| 1824 | 道光 4 | 文政 7 | 90000根  |
| 1825 | 道光 5 | 文政 8 | 40000根  |
| 1826 | 道光 6 | 文政 9 | 110000根 |
| 1830 | 道光10 | 天保元  | 30000根  |
| 1831 | 道光11 | 天保 2 | 50000根  |
| 1832 | 道光12 | 天保 3 | 60000根  |
| 1836 | 道光16 | 天保 7 | 70000根  |
| 1837 | 道光17 | 天保 8 | 250000根 |
| 1838 | 道光18 | 天保 9 | 90000根  |
| 1839 | 道光19 | 天保10 | 60000根  |
| 1840 | 道光20 | 天保11 | 80000根  |
| 1842 | 道光22 | 天保13 | 30000根  |
| 1843 | 道光23 | 天保14 | 60000根  |
| 1844 | 道光24 | 弘化元  | 50000根  |
| 1849 | 道光29 | 嘉永 2 | 60000根  |
| 1850 | 道光30 | 嘉永 3 | 50000根  |
| 1853 | 咸豊 3 | 嘉永 6 | 60000根  |
| 1854 | 咸豊 4 | 安政元  | —       |
| 1855 | 咸豊 5 | 安政 2 | —       |
| 1856 | 咸豊 6 | 安政 3 | —       |
| 1858 | 咸豊 8 | 安政 5 | 20000根  |
| 1860 | 咸豊10 | 万延元  | 150000根 |
| 1875 | 光緒元  | 明治 8 | 60000根  |

注) 『清代中琉関係档案選編』より作成

「根」も「條」も中国の単位で、日本の「本」と同じである。

て扱われる重要な商品で、『清代中琉関係档案選編』を見ると、毎回何種類もの布が大量に輸入されていたことが証明される。針はその布と密接に結びつく商品であり、だからこそ大量に輸入されていたのではないだろうか。

以上のように、女性の家事労働における最も小さい道具の針は、近世を通じて長崎・琉球に大量に輸入された舶来品でもあった。

### 3. 裁縫の近代化 — 結びにかえて

ここまでは、江戸時代の女性の家事労働における「裁縫」と、その道具である「針」に焦点をあてて考察してきた。最後に、江戸から明治にかけて裁縫がいかに変化したかという近代への展望を、「裁縫と教育」、「手縫いからミシン」の視点から考えたい。

明治という近代国家になって、「裁縫」は学校教育と結びつくことになった。明治5年（1872）の「学制」頒布によって国民皆学、つまり全国民の就学が唱えられはしたものの、女子にはなかなか浸透せず全体の30%程度に止まっていた。その対策として、学校教育に裁縫を課すことによって女子の就学率を高めようとしたのである<sup>20</sup>。

具体的にみると、明治26年（1893）7月22日の文部省訓令第八号において、次のように裁縫教育の振興が唱えられた。

#### 女子教育ニ関スル件

普通教育ノ必要ハ男女ニ於テ差別アルコトナク、且女子ノ教育ハ将来家庭教育ニ至大ノ関係ヲ有スルモノナリ、現在学齡児童百人中修学者ハ五十人強ニシテ、其ノ中女子ハ僅ニ二十五人強ニ過キス、今不就学女子ノ父兄ヲ勧誘シテ就学セシムルコトヲ怠ラサルヘキト、同時ニ女子ノ為ニ其教科ヲ益々実用ニ近切ナラシメサルヘカラサル、裁縫ハ女子ノ生活ニ於テ最モ必要ナルモノナリ、故ニ地方ノ情況ニ依リ成ルヘク小学校ノ教科目ニ裁縫ヲ加フルヲ要ス（後略）

裁縫は女性の日常生活で最も必要なものであるから、小学校の教科に加える

という。これ以降、全国的に裁縫教授が本格化し、裁縫学校も順次設立されていった。一例を挙げると、伊丹（現兵庫県伊丹市）では山下きくを校長として、明治40年（1907）に町立の裁縫学校が設立されている<sup>21</sup>。伊丹高等学校の前身であるこの学校は本科3年、補修科1年の課程で、卒業生の腕前は地域でも高く評価されていたという。伊丹市立博物館には生徒が製作した壁掛けや羽子板などが所蔵されており、その丁寧な仕上がりからも裁縫学校のレベルの高さがうかがわれる。

ところで学校である以上、教師の存在は欠かすことができない。優秀な人材を育てるために、裁縫教師のためのマニュアル本もつくられている<sup>22</sup>。そこには裁縫教授の必要性などの理論的な事から、教授方法・教材などの具体的な実技指導法についても記されている。

もちろん生徒に対しても、裁縫を修得するための参考となる「裁縫書」もつくられた。前書きには、「普通の衣服は元より之に附属する諸種のものに付て、普ねく裁ち方・積り方等を網羅し専ら実用に供せしむるにあり、故に諸学校の参考書となると同時に家庭の好侶伴たることを疑はず<sup>23</sup>」と書かれている。様々な種類の衣服の裁断法から、針の持ち方や運び方・縫い方まで衣類の製作全般についての記述がある。これをもとに、文部省によって検定がおこなわれる裁縫教科書ものちにつくられるようになる<sup>24</sup>。理論面では裁縫を学ぶ必要性など、実技面では和裁、子供服（ズボン・スカート）の製作方法も裁縫教科書には載せられている。

当時、裁縫の役割はどのように考えられていたのだろうか。次の史料を見てみよう<sup>25</sup>。

裁ち縫ひは女子が家事を治むる上に於て、日常欠く可らざる必須の手芸なる事は何人と雖も認むる所なり。去れば将来良妻となり賢母とならるべき子女が、家庭に於て尚ほ精しく之れを研究せんとするに、或は又各学校に於て裁縫教授の資料たらしめんとする。

やはり裁縫とは女性の家事労働の内でも必須のもので、裁縫教科書などは良


妻賢母教育のためにあるという。

以上のように、家庭もしくは地域の身近な人物から、日常性のなかで習得していた江戸時代の裁縫は、明治になって近代教育制度と結びつき重要視された。その結果、教育内容や指導法も改められ、女性の必須課題としての要素がより明確化していった。

江戸から明治という時代の転換にともない、裁縫の中味も近代化した。すなわち、針を手を持つ手縫いの作業から新たな道具のミシン利用へと変化したのだ。裁縫教科書にもミシンを利用した衣類の製作法が解説されており、学校教育にも導入されていたようだ。

ところで、世界でミシンが初めて発明されたのは1755年のドイツである。この技術が各国に広まり、その後、イギリス・アメリカでも順次新機種が発明されるようになった。欧米において、「ミシン産業の急激な発達によるミシンの普及は、その重要な影響の一つとして、婦人の社会的地位の向上に多大の貢献をした<sup>26</sup>」という。つまり、ミシンの出現によって、女性は手縫いによる洋服づくりから解放され、容易にしかも短時間で多くの衣類をこしらえることができるようになった。そしてその空いた時間を読書や芸術鑑賞などの趣味に使ったり、社会運動に参加するなど、ミシンの登場は女性の地位向上にも役だったのである。

一方、日本に初めてミシンが渡来したのは万延元年（1860）のことであった。かの有名な中浜万次郎はアメリカで写真機とミシンを買い求め、6月24日に帰国してそれを公開した。これが日本におけるミシンの初登場である<sup>27</sup>。ちなみに、当時世界的には手廻し式と足踏み式の二種類があったことは、1862年のロンドン万博の展示品からも明らかだが、万次郎が持って帰ったのは手廻し式ミシンの方であった。

明治7年（1874）の「女訓」には、「近ごろは、西洋に留学女性をつかわされ、学び得たるものありて、その工みに於ける、一人にして百人のかわりをすべき蒸気仕掛のものなどあり<sup>28</sup>。」と、「西洋縫機器図」（ 3）と呼ばれたミ

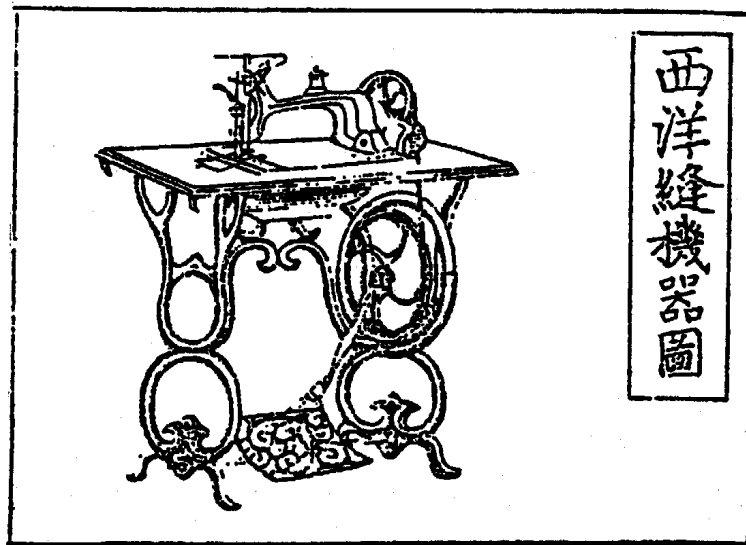


図3 ミシンの図  
「女訓」1874年（『女大学集』）より

シンの絵も紹介している。このころになると動力に蒸気を利用するミシンも出現し、手縫い百人分の仕事をするという。近代文明の出現によって、江戸のお針子などの既存の職業の衰退が考えられる。

昭和になり国産ミシンが出現する<sup>29</sup>まで、日本は輸入に依存していて、シンガー社を始めとする外国ミシンメーカーにとっては絶好の市場であった。「不幸にして今後万一、外国と戦争が起り、外国から裁縫機械の輸入が、全く杜絶した時には、如何にして国家総動員に給する数千万人の被服を裁縫することが可能（でき）ましようか。<sup>30</sup>」と、戦争によって万一ミシンが輸入停止になった場合、大量の軍服をいかに製作するかを危惧している。

このようにミシンの導入によって洋服が普及し、家事労働においても女性の負担は軽減したが、一方で大量の軍服製造も可能となった。ミシン発達の背景にも近代の戦争の歴史がからんでいることを忘れてはならないだろう。

ところで一口に「針」と言っても、「縫針」だけでなく、釣り針や医療の分野で使われる鍼もある。中国の百科辞典である『三才図会』器用十二卷「針」の項には、裁縫用の針とあわせて「九針」についても書かれている。九針とは

『和漢三才図会』によると、鑿針・貝針・鋌針・鋒針・鉞針・貝利針・毫針・長針・大針のことで、全て医療用の針をさす<sup>31</sup>。江戸時代の日本でこれらは使われていなかったが、近世前期から鍼術は行われている<sup>32</sup>ため、何らかの針が医療用として使われていたはずである。また【表2】にもあるように、中国から「釣針」も輸入されている。

しかし小稿では「女性と針」の視点から論を進めたため、医療用の「針」や「釣針」など、他の用途の「針」については言及できなかった。今後の課題としておきたい。

(注)

- 1 江戸の裁縫箱は針さしが上にのせられているのに対して、大坂では別に棒を立ててつけられている。このタイプの裁縫箱は昭和初期まで使用されており、兵庫県の伊丹市立博物館には5つの引き出しがある大坂型のものが所蔵されている。大きさは幅・奥行き共に約20cm、高さが約25cm、針さし部分を含めると約40cmである。
- 2 網野善彦「養蚕と女性」（網野善彦他共編『歴史の中のジェンダー』藤原書店、2001年）
- 3 後藤みち子「衣料生産とジェンダー」（黒田弘子・長野ひろ子編『エスニシティ・ジェンダーからみる日本の歴史』吉川弘文館、2002年）、長野ひろ子「日本近世の衣料生産とジェンダー言説」（同『日本近世ジェンダー論』吉川弘文館、2003年）
- 4 高田義甫「女訓」（石川松太郎編『女大学集』平凡社東洋文庫、1977年）
- 5 長野ひろ子「日本近世の衣料生産とジェンダー言説」（同『日本近世ジェンダー論』吉川弘文館、2003年）
- 6 上原素白「裁縫早手引」（田中ちた子・田中初夫編『家政学文献集成続編 江戸Ⅳ』渡辺書店、1971年）
- 7 『和歌山市史』第5巻
- 8 小泉和子「家事の近世」（辻達也、朝尾直弘編『日本の近世』第15巻、中央公論社、1993年）
- 9 同上
- 10 アンソニー・リード『大航海時代の東南アジアⅠ』（平野秀秋・田中優子訳、法政大学出版局、1997年）145～156ページ
- 11 アート・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』（大修館書店、1984年）456ページ



- 12 日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』第7巻、67ページ、1996年
- 13 石川明德「京都土産」（新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』第1巻、臨川書店、1985年）357ページ、渡邊滋『日本縫針考』（文松堂出版、1944年）35ページ
- 14 谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第30巻（三一書房、1982年）
- 15 水雲堂孤松子「京羽二重」（『新撰京都叢書』第6巻、光彩社、1968年）
- 16 「京都買物独案内」（新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』第7巻、臨川書店、1984年）筆者は天保版が巽永寿軒、嘉永版は岩井至徳堂である。
- 17 岡田敏雄『ぬい針』（朝日書院、1966年）31ページ
- 18 宋応星『天工開物』（平凡社東洋文庫、1972年）
- 19 真栄平房昭「琉球の進貢貿易論をめぐる一視点」（沖縄文化研究所紀要『沖縄文化研究』25号、1999年）
- 20 関口富左『女子教育における裁縫の教育史的研究』（家政教育社、1980年）278ページ
- 21 『伊丹市史』第3巻、278ページ
- 22 山本キク『新撰裁縫教授法』（中文館書店、1922年）神戸女学院大学所蔵
- 23 小岩井規太郎・塩田眞三『実用裁縫全書』（博文館、1903年）3ページ、神戸女学院大学所蔵
- 24 吉村千鶴『現代裁縫教科書』（東京開成館、1925年）神戸女学院大学所蔵、成田順『中等教育裁縫教科書』（大成書院、1928年）神戸女学院大学所蔵
- 25 高橋貴四郎『新編裁縫学全書』（女子技芸教育会、1911年）3ページ、神戸女学院大学所蔵
- 26 日本社史全集刊行会編著『日本社史全集一蛇の目ミシン工業 創業五十年史』（常磐書院、1977年）52ページ
- 27 日本ミシン産業史編纂委員会編著『日本ミシン産業史』（社団法人日本ミシン協会、1961年）、吉田元『裁縫ミシン』（家政教育社、1965年）
- 28 前掲4、84ページ
- 29 家庭用ミシンも工業用ミシンも戦後、とくに1950年以降に生産台数をのばした。日本ミシン輸出組合『ミシン産業の歩み』（私家版、1979年）参照。
- 30 宗田覚『裁縫ミシン』（私家版、1921年）24ページ
- 31 日本では「針」と「鍼」の字は使いわけているが、中国では区別していないという。
- 32 富士川游『日本医学史綱要』（平凡社東洋文庫、1974年）

Summary

## Needlework and the Woman of the 19th Century Japan

Mihoko Minori

Needlework is the most fundamental housekeeping labor of the woman in the early modern and has description which is sewing also in the diary. Domestic manufacture also of the needle indispensable to needlework was carried out in Kyoto. Moreover, needle was imported in large quantities by Nagasaki and Ryukyu from China. When the Meiji period came, needlework came to be taken in by the educational system for a woman's school attendance promotion. In modern needlework, housekeeping labor of a woman also changed a lot by having introduced a new model called a sewing machine.